

色街かんなみ新地 70年の歴史に幕

変わる尼崎 市民の「悲願」成就

飾らない活気で「アマ」の愛称で親しまれる兵庫県尼崎市。中でも阪神尼崎駅前から出屋敷駅まで続く商店街には青果店や創業50年を超える純喫茶があり、多くの買い物客でにぎわっている。その商店街の近くに歓楽街「かんなみ新地」があった。この地に衝撃が走ったのは昨年11月。兵庫県警尼崎南署と同市が連名で、性風俗営業の中止を求め、警告書を出したのだ。風俗営業をしていたとされる約30店舗は自主閉店し、かんなみ新地は約70年の歴史に幕を閉じた。

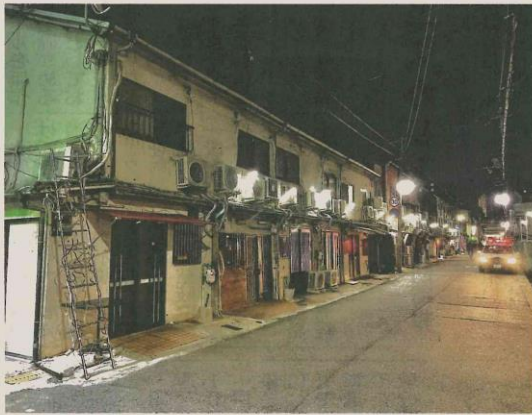
2〜3階建ての木造建築が並び、壁に取り付けられた大量の室外機が目を引く。昨年

の年末、周辺では警戒する兵庫県警のパトカーの赤色灯とハザードランプが異様な雰囲気を出していた。

「飲食店舗の形態をとりながら、実態は（中略）性風俗店であるとの情報を得ています。（中略）上記違法な営業をしているのであれば、直ちに中止するよう警告いたします」

県警と市は昨年11月1日、このような内容の警告書を約30店舗が加盟していた同新地組合に手渡した。

「警察は見て見ぬふりしてくれてたんですけどね。最近は派手になりすぎてた。あくまで飲食店の建前を守らなアカンのに」。この地で同年11月にバーをオープンした女性はこう話す。



実は、警察も見て見ぬふりをしていただけではない。連日型コロナウィルス禍の中で、法風俗店として摘発した例もある。しかしその後、徐々に各店舗が営業を再開していったという。



警告書から約1カ月が経ったこのかんなみ新地
昨年12月、兵庫県尼崎市

を受けた。焼け野原となった商業地で不足する配給。戦後、出屋敷駅北東に巨大な團地が出現するのは必然だった。かんなみ新地が誕生したのはそのころ、いわゆる「青線」だ。

33年に売春防止法が施行された後も、表向きでは飲食店としながら女性従業員が性的サービスを提供していたとされる。そして、平成、令和、戦後の混乱期から約70年にわたり、飲食店は残り続けた。

「悲願ですよ」。尼崎市内でバーを経営する市議会議員の林久博さん(58)は、かんなみ新地の閉店をこう評した。新地周辺は阪神尼崎駅まで徒歩10分、大阪・梅田からも電車で30分以内の距離とあって、アクセス抜群の地域。

戦前から鉄鋼や電力などの基礎産業が集まる工業都市だった尼崎は、昭和20年3月8月にかけて数度にわたる空襲を受け、機運は少しずつ高まっていった。平成18年の兵庫県体を前に、地域住民らが中心となり「阪神尼あんしんまちづくり協議会」を設立。22年に就任した稲村和美市長も撲滅に前向きな姿勢を見せていた。